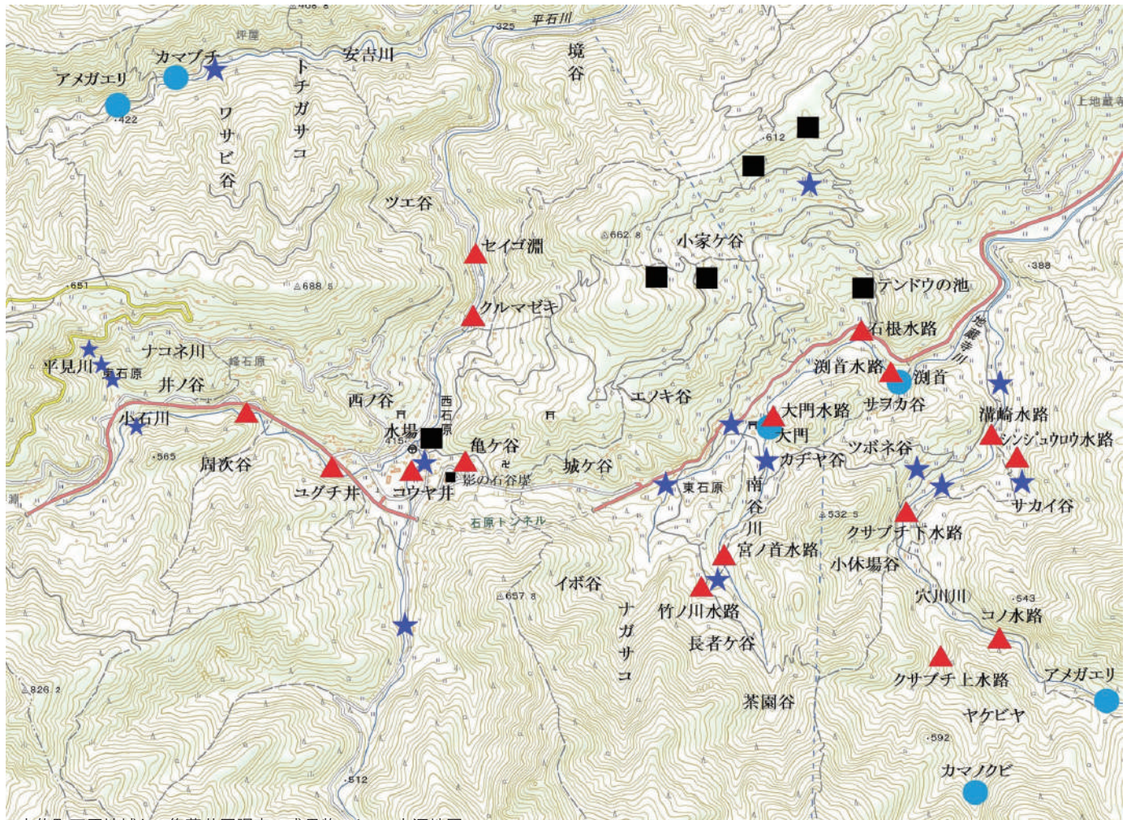
地域・コミュニティ活動助成

奥四万十山の暮らし調査団

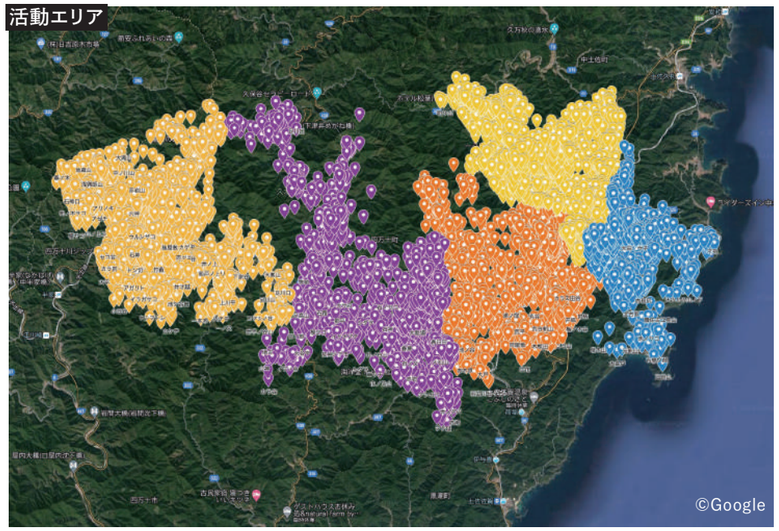
高知県四万十町ほか

高知県内の屋号や集落の民衆知の記録（地域資源）の可視化活動



土佐町石原地域との集落共同調査の成果物の1つ、水源地図

活動エリア



高知県四万十町を中心として活動する。図は町内の小字の地名をプロットしたもの

団体設立経緯

奥四万十山の暮らし調査団は、過疎高齢化が急速に進む高知県の農山村で消失していく田畑・山林の小地名と、それにまつわる生業を記録し、後世に伝えることを目的とします。2016年、研究者ではない住民主体の団体として、四万十町民を中心としたメンバーにより設立されました。

活動概要と活動対象範囲

地名は暮らしの中で使われ、長い歴史の中で伝承されてきた、「民衆知」の一つです。そこで『**長宗我部地検帳**』に記載された小地名を手掛かりに古老への聞き取り調査を実施、小地名を現地比定して地図に表示し、地名にまつわる伝承や商品作物の加工、土地利用などの属性を住民とともに記録することを継続しています。

この歴史の中で培われた民衆知としての記録は、土地の再開発や加工品開発などの地域おこしにも重要なデータとなることと確信し、すべてホームページ「**四万十町地名辞典**」で公開しています。

活動に至った理由や背景

地名や地物は、自然環境や土地環境などを人々が利用する中で命名され、農作物の栽培適応（ワサビ谷）や生活の知恵（クロヌタ：猪のヌタ場）、災害の記憶（大ハケ：崩落地）、民俗伝承（大道法師：妖怪地名）などさまざま属性を含んでいます。

地名の多くは「小字」として行政の地図に記載されますが、ほ場整備や耕作放棄、植林によって改変された田畑・山林の小地名は記録されず、古老や農業従事者の記憶に残るのみとなっています。農業従事者の高齢化が進む中で、残された時間は少ないと考えられます。

活動内容と成果

●1年間の活動

2021年4月　四万十町での聞き取り調査・記録整理（昭和地区）：屋号収集

4・5・7月　土佐町での聞き取り調査・記録整理（石原地区）：屋号収集完了、発刊作業

7月　四万十町での聞き取り調査・記録整理（茅吹手・地吉・戸川の3地区）：屋号収集

8月　江戸中期の地誌『土佐州郡志』のデータベース化：郷村ごとの山川・寺社などの地物入力

9月　高知県字一覧（11,699カ所）のデータベース化：十進座標値を入力し可視化を図る

10月　四国森林管理局森林計画図のデータベース化：山名毎の林班、十進座標値、地物など入力

11月　『長宗我部地検帳』のデータベース化：ホノギ別の小字など比定地名、所在地などの入力

12月　四万十町大正地域の聞き取り調査（芳川・烏手の2地区）

2022年1月　調査記録の整理、地域資源地図の作成、フィールドデータベースでの公開

2月　調査報告書の原稿整理・校正

3月　調査報告書『**地域資料叢書23 続四万十の地名を歩く**』の刊行

●高知県内の屋号や集落の民衆知の記録活動

①「いしはらの里・むかしを語る会」などとの共同調査の実施

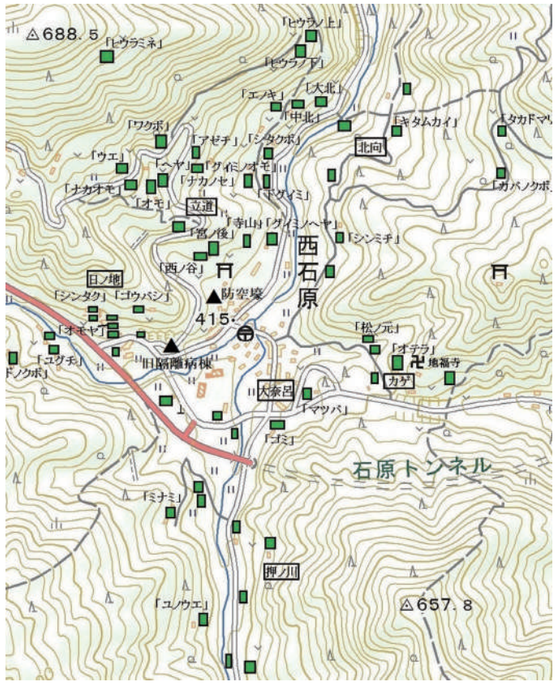
土佐町石原地域の「**いしはらの里・むかしを語る会**」と集落共同調査を3年間実施し、古老に聞いた屋号と昭和の暮らしをまとめた『石原の文化資源ノート』を21年10月に発刊しました。

当団体は、九州大学服部英雄研究室の調査方式による地名民俗調査を四万十・香美地域を中心に継続し、調査手法のノウハウの普及に努めています。当団体事務局長の楠瀬慶太が18年に『高知大國文』49号で論文「土佐山村の屋号研究試論」（第40回平尾学術奨励賞受賞）を発表し、高知県内で広範に使われてきた屋敷に付けられた地名「屋号」への住民の関心が高まってきました。

「いしはらの里・むかしを語る会」は楠瀬をアドバイザーとして支援要請。以来、当団体と共同調査として実施し、今回、成果品を発刊することになりました。印刷費は同会が取得した高知新聞厚生文化事業団の助成金を活用しています。

また、梼原史談会とも数年前から「梼原町の屋号調査」の成果品を補完する形で共同調査に取り組んでいますが、コロナ禍により中断しています。

土佐町石原地域の現地調査の様子（**上3点**）と、聞き取りを元に作成した屋号地図（**右**）



調査結果をまとめた報告書
『続四万十の地名を歩く』

②四万十町を中心とした集落調査の実施

調査団形式で、個々のメンバー7人がそれぞれの得意分野を生かして調査研究にあたりました。四万十町昭和地区四手崎集落、木屋ケ内地区、芳川地区、烏手地区などの集落調査は武内文治、楠瀬慶太が中心となって実施しました。

特に芳川地区の調査にあたっては、山﨑真弓が「小野川利國氏の手記」を発掘。この新資料をもとに「天理教本部の昭和大改修献木」における旧大正村芳川国有林の役割について天理教高知大教会を取材し、現地を踏査して聞き取り調査を行いました。

神田修は県内の道祖神信仰を文献から抽出し、分析する作業を担当しました。森下嘉晴は県内の地域資源マップ4枚を作成し、「田野々物語」、「志和今昔」の地図解説を執筆しました。田中孝子は四万十川流域の集落のタタリ神信仰を実地調査しました。山﨑徹は土佐清水市三崎の中世の港の歴史について踏査しました。岡林悠太は江戸時代の土佐藩と宇和島藩の間で起きた争論について、史料を収集して検討しました。

③調査報告書の刊行

上記の調査メンバーの調査成果は、いずれも調査報告書『**続四万十の地名を歩く**』(112ページ、カラー）に収録して100冊を刊行。報告書は図書館や大学など関係機関に配布するほか、当団体ホームページでPDF公開しています。

以下、『続四万十の地名を歩く』の序言を引用して記します。

＊　＊　＊

本書には、調査団のメンバーが当該地域の歴史民俗に関する調査研究成果をまとめた論考11本を収録した。第1章は「四万十の地名を歩く」で、四万十川中流域の四万十町の集落調査の成果4本を載せた。ここでは、江戸時代の村にあたる大字ごとに地域史を描く手法を用いている。調査手法は、古老への聞き取り調査と文献史料の分析を組み合わせて、歴史地名の現地比定・記録を行うとともに、ミクロな地誌を描いている。聞き取り調査は、海岸部の志和、山間部の木屋ケ内・芳川、四万十川沿いの四手崎と性格の異なる集落で行った。各論は、「『地検帳』に見る村落景観」と「昭和期の村の姿」の2章立てで整理し、中近世の村落景観の復元と昭和期の生活誌を並列する形で記している。一部差別に関する項目もあるが、地域の歴史として記録を残すことが重要と考え、詳細に記述している。

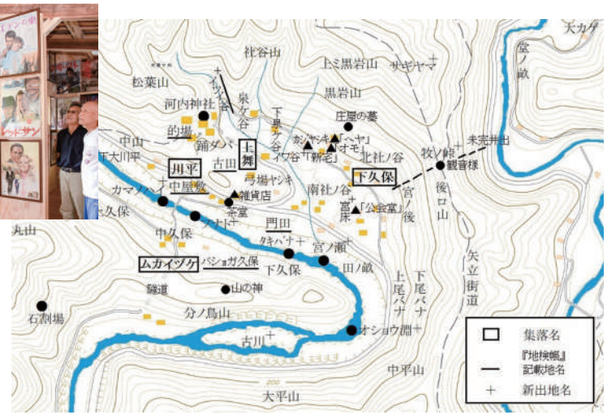
第2章は「四万十の地名を探る」で、昭和6～8年に旧大正町で行われた大規模な材木搬出に伴う資料紹介と、流域のタタリ信仰の調査記録を報告し、四万十の山の暮らし、祭礼に代表される信仰の実態を明らかにしている。第3章は「四万十の地域資源地図」で、田野々・志和での現地調査を基に作成した2枚の地域資源地図について解説している。第4章は「幡多地域の歴史と民俗」で、中近世の幡多に関する文献史学の論考2本と、幡多地域を含む民俗学の論考1本を載せた。戦国期の港や江戸初期の愛媛と高知の藩境の実態、道祖神信仰の背景を考察している。

本書では、幅広い年代と分野の研究者たちの協力で、高知県西部をフィールドに多くの調査記録と研究成果を蓄積することができたと考えている。本県では2021年度から新しい『高知県史』の編纂もスタートしている。本書が基礎資料となり、県西部の歴史研究が一層進展することを期待したい。

＊　＊　＊

④文献調査によるデータベース化とオープン化

地名や民俗の集落調査を行うための基礎資料となる中世の『長宗我部地検帳』などの文献をデータベース化して、精査できたデータについては誰もが利用できるようにホームページ「**四万十町地名辞典**」、「**Googleマイマップ**」、地域文化資源データベース「**高知工科大学フィールドデータベース**」で公開しています。



四万十町木屋ケ内地区の調査で訪れた個人宅の昭和ポスター館（上）と、収集した地名を落とし込んだ地図（右）

四万十町地名辞典
https://www.shimanto-chimei.com

「YAMAP」アプリ内のマイページ
https://yamap.com/users/279155/

高知工科大学フィールドデータベース
https://sites.google.com/view/kochi-gis/home/

QRコード

「Googleマイマップ」は各サイトから適宜埋め込みでリンクされている

【公開中の主なデータベース】

中世、土佐一国の『長宗我部地検帳』／江戸中期の地誌『土佐州郡志』／明治初期の土地台帳の小字『高知県市町村別小字一覧表』／明治期の『高知県神社明細帳』／高知県内の山名などを記す『四国森林管理局森林計画図』／『高知県集落台帳』『高知県文化財地図情報』『高知県河川調書』　ほか多数／現地踏査の地図記録

課題と解決方策

当団体の活動は、いわゆる大学の研究者でなく、地域住民が主体となって集落の生活誌を記録する点に特徴があります。この方法論が村落の現地調査の課題の多くを克服するものであり、地域での歴史の継承や活用につながる可能性を秘めていることはすでに指摘のある通りです（高木徳郎2018「奥四万十山の暮らし調査団・編『土佐の地名を歩く―高知県西部地名民俗調査報告書Ⅰ』」『棚田学会誌』19）。

具体的には、住民自身が「記録」活動に関わることで地域資源の価値を再認識する「掘り起こし」の過程が、活動を通して発生します。また、調査記録を地域資源地図や報告書、ウェブサイト、フィールドデータベース、Googleマイマップ、YAMAPアプリなどの形で視覚化して地域内外に共有することで、住民自身がこれらを地域活動や文化財の保護・継承などの「普及」の段階に持っていくことができる点が重要です。

この「記録」「掘り起こし」「普及」という「地域再生の歴史学の3段階プロセス」（楠瀬2013「地域再生の歴史学」『地方史活動の再構築』雄山閣）の実践活動（社会実装）を通して、住民が地域の身近な歴史や民俗という地域資源を生かして、集落を活性化する方法を探っていけることが期待されます。

今後の予定

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、調査地域の承諾が得られないことが多々ありますが、粘り強く四万十町周辺を継続して調査していきます。また、九州大学服部英雄研究室の調査方式による地名民俗調査を県下各地で実施できるよう、関係団体と共同で普及啓発していきます。

奥四万十山の暮らし調査団

2016年1月設立／メンバー数：10人／代表者：武内 文治（たけうち・ぶんじ）
www.shimanto-chimei.com

地域住民が主体となって集落の記録を収集し、生活の記憶を記録していくことで、地域資源の価値を再認識します。活動を通じた調査記録は、報告書やホームページなどの形で発信、地域内外に共有していきます。